

2014年5月11日 母の日主日礼拝

説教 幸いな親子関係のために

エペソ人への手紙6章1-4節

【ノアとその息子たち】

お母さんたち、いつもありがとうございます。母は神さまからの最大のプレゼント。そして、母と子どもは深く結びついています。それなのに、聖書は「あなたの父と母を敬え」と教えます。どうやら、子どもが親を、敬うということは、だれでも自然に、できることではないようです。そもそも「父母を敬う」とは何をすることなのでしょう。ノアの三人の息子のうち、セムとヤペテは、尊敬できない姿のノアを敬い、覆いました。けれどもハムはどうやら、父親をあざけて他の兄弟に知らせたようです。ハムは、まるで待っていたかのように敬うことをやめました。問題は、実はハムは私たちみんなの中にもいるということ。子どもは、子どもだというだけで、親に完全な親、理想的な親を求めやすい。子どもだというだけで親にそのような完全さを要求できる権利を持っていると思ってしまう。けれども実際は、親は不完全さの中で悩んでいる。悩みながら、我が子を育てる責任と義務を放棄しないで担い続ける。そのことへの感謝と尊敬と共感。それが聖書の「父母を敬う」ということなのです。

【母という病】

岡田尊司医師の著書に「母という病」や「父という病」があります。「病」と呼ばざるを得ないほど、親子の関係は重大。けれども、「病」なら、いやされるという希望があります。そのためには「安全基地」となってくれる人間関係を持つこと。信頼でき、思いやりがあり、何でも安心して話せる存在。いつも

変わらず安定して接してくれる存在を見つけることです。私たちは幸いです。すでに「安全地帯」を持っているから。それは、神さま。そして、神さまが与えてくださった兄弟姉妹。この安全基地が私たちがいやし、父や母を覆うことができるまでに回復させるのです。

【赦していない私たち】

私たちが心から、父母を敬うことができない理由に、私たちは親を「赦していない」ことがあります。まず、「親の罪」が赦せない。たとえば、親の不倫や暴力。それらの罪ゆえに親がゆるせない。また「親の弱さ」、親に経済観念がないこと、えこひいきをされたこと、賭け事などのいろいろな悪習慣への依存症などという弱さを持った親。それが赦せない。あるいは、「親の未熟さ」、親自身が親離れしていなかったり、世間体を第一にしていたために、いろいろな傷を子どもとして受けたこと。こうしたことは、既に召されてしまった親に対しても赦せないでいることがあります。大の大人が口に出してしまえば「なんで、そんなことをいつまで赦さないでいるんだ」と言われてしまいそうなことかもしれません。けれども、本人にとっては、とても重い内容です。まるで、私たちの中で、傷ついたその部分が子どものままでいるよう。「えこひいき」されたと感じた幼い自分。自分は親に愛されていないのではないかと思ひ、ひざを抱えて泣いているような子どもが私たちの中にもいて、親を赦すことを泣き叫びながら拒絶している、といったことがあるのです。そして、父母との関係はすべて人間関係の土台です。父母を赦すことができない部分を残しているなら、その人は、ほんとうの幸せを生きることができないのも、当然のことです。

【主にあって】

エペソ人への手紙は「主にあって」、つまりキリストにあって、父母を敬えと語ります。キリストにあるところに新しい人間関係が作り出されます。親子の関係において傷ついた私たち。親子の関係ばかりではありません。友だちやその他、さまざまな関係の中で、傷ついた私たち。傷ついたまま、子どものように心をかたくなにしていた私たち。主イエスは、そんな私たちをそのまま受け入れてくださいました。私たちが注がれなかった、注がれ足りなかったと感じていた愛を、主イエスが注いでくださいました。

親も、いろいろな問題に直面するとき、立ちすくみます。そして力なく「あれはしょうがなかった。こんな事情があったから」と言うことしかできないのです。けれども、主イエスは一言もおっしゃらずに、すべてを引き受けてくださいました。親の罪も、親の弱さも、親の未熟も、みんな引き受けてくださり、私たちの父となり母となり、姉となり兄となり、赦すことができない私たちを、抱き取ってくださいました。私たちの憎しみを、敵意を、復讐を、十字架の上で、ご自分が受けてくださった。血を流してくださったのです。

そのように主イエスに抱かれたのがクリスチャンです。私たちは、自分の親も同じ主イエスの腕の中に抱かれていることを知っています。もう「父母を赦すことができない」とは言うことはできません。主が、自分の、そして親の、罪と弱さと未熟さを、受け入れて赦してくださったことを知って、心から喜んでいるからです。そして、たがいに、「ああ、ごらん。主イエスのあわれみを。大きな愛を。」と指さし、教え合いながら生きる毎日が、もう始まっているのです。